

法、經ともに盛況

[illegible]

近畿學校體育打合會開催

[illegible]

航空部夏の猛勢

[illegible]

講演と映畫の會

空への正しき認識を保
 認校を創し、午後一時から第一
 座席を確保して、早稲田大
 の空へ正しき認識をうたふと
 とともに、青は航空宇宙の情と
 により、東京特別開校の準備
 員が、東京特別開校、新し
 食糧」を本場で精製切ると新

旅行部推薦五コース

秋の近郊を歩かう
 旅行部推薦五コース
 ① 湯島・大塚・池袋コース
 ② 上野・荒川・池袋コース
 ③ 大塚・池袋・荒川コース
 ④ 池袋・荒川・大塚コース
 ⑤ 池袋・大塚・湯島コース

すつ員ブラク眞窩大京 帽角と菊野

[illegible]

二千日仙臺

は十日、二十一日の朝日
に種田文相をはじめ閣僚の
をまつ、東北最大で、
ことになった。開成会では
と開成会の基本路線」「開
成会」の「開成会」は「開
成会」の「開成会」を主とし
の「開成会」の「開成会」を
主とし、開成会とその開成
会として、開成会、開成
会が、開成会、開成会の公
には、開成会、開成会、開成

高等師範學校教授その他所
政者によつて研究発表、

が行はれるが、第一夜の公
には本學名譽教授矢野龍二

森島庫太博

用國語を長ならひに
七十谷田、まづ長興會館

する人々の肩をぬいつゝ川

深淵や城主の寺も懸崖
 之類の突ひ出しけり母屋

その長年東京に於いた氏の文學の變遷と深さとに實に驚異の前であるが、本書は、數多い諸作品の中、特に氏が若き日の苦悶と情熱から脱して漸く廣やかな境地へ出て來た作家的變遷の偉大さを知る所以の傑作である。

見て家論 中島
 既刊 夏目漱石集・國木田獨步集・岸田國士集

近代的良識と厳正な批判精神をもつて、著者は常に變遷しない世相のうちに明日への道を指示する。これは凡の人間未だかな文藝

われら如何に生くぞ

明治初年琉球藩民七十人が臺灣に漂着して臺人の殺戮
臺灣征伐に発展する経緯を作者一流の素朴な筆によつ

時。その一環たるは小説作法の新聞として好評である。

バルザック全集 第七回配本

内二冊

新神
ア
ポ
ル
チ
ナル
ミル
エ

「ユルシユウル・ミルミ」は健全な家庭讀物である。然
ルザツクの脂濃い體臭が相變らず漂ひ、一見通俗的な

バルザック論

新世界文學全集第

自我禮拜
 作第三男の贈り
 自由人
 ベレシの園
 伊吹

愛他熱の種を撒きつづけた、ベレシの園にふたたびの春を告げる。愛他熱の種を撒きつづけた、ベレシの園にふたたびの春を告げる。愛他熱の種を撒きつづけた、ベレシの園にふたたびの春を告げる。

監修 寺澤寛一
 監修 寺澤寛一
 監修 寺澤寛一

東京大学文学部 二

監修 寺澤寛一
東京大学工学部博士 井口常雄

第一回配本・發賣分

附——二次元境

天然物

1
3
4

新 秋 隨 筆

暴 風 の 眼

山 本 修 二

「暴風の眼」は、山本修二氏の随筆である。この随筆は、作者の自伝的な要素を含み、自然現象としての暴風と、人間の精神世界との交錯を描いている。文章は、冷静な観察と鋭い洞察を兼ね備えており、読者に深い印象を与える。特に、暴風がもたらす破壊的な力と、それに対する人間の無力感の対比が、随筆の中心テーマとなっている。

満洲文學の現在と将来

山 田 清 三 郎

満洲文學の現状を考察し、その将来について展望を述べている。山田清三郎氏は、満洲の文学的・文化的背景を詳しく分析し、日清戦争以降の文学的変遷を論じている。特に、満洲の文学が日本の文学に与えた影響と、その独自の発展の可能性について、鋭い指摘を行っている。



像 諸 漢 羅

子 病

伊 東 羅

「子病」は、伊東羅氏の随筆である。この随筆は、子育ての経験から得た教訓や、子どもの成長に伴う親の心境の変化を描いている。文章は、温かい筆致と、切実な感情が特徴であり、多くの読者に共感を生むであろう。

無 聲 の 堂

井 上 明

「無聲の堂」は、井上明氏の随筆である。この随筆は、静寂な空間の中で感じる孤独や、無言のうちに伝わる感情について述べている。文章は、簡潔で力強い表現が特徴であり、読者の心に深く響くであろう。



庭 閑 鹿 之 助

「閑鹿之助の庭」は、閑鹿之助氏の随筆である。この随筆は、庭園の美しさや、自然とのふれあいの大切さについて述べている。文章は、詩意的で、読者に癒しを与えるような内容となっている。



日 本 科 学 史

伊 東 羅 氏

「日本科学史」は、伊東羅氏の随筆である。この随筆は、日本の科学の発展の歴史を振り返り、その現状と将来について述べている。文章は、学問的な内容でありながら、読みやすく、読者に科学的素養を養うのに役立つであろう。

佐々木新村博士編

萬葉集

佐々木新村博士は、日本の文学史に重要な貢献をした人物である。この随筆は、彼の業績を称え、その研究の成果について述べている。

「佐々木新村博士の業績」は、佐々木新村氏の随筆である。この随筆は、自身の研究の経緯や、文学研究の重要性について述べている。文章は、学問的な内容でありながら、読みやすく、読者に科学的素養を養うのに役立つであろう。

白井直眼鏡店
京都市大法院正門前 電話 32878

安田銀行出町支店
河原町今出川角

眼鏡 店鏡眼川吉
前科眼院診察大京都京・店本
番一五八二五番
前門正院病立府京・店支
番〇三二上

小山齒科醫院
下町一丁目
小山正光

語スラフ
集募生講聴
新學期九月
廿二日開始
館學佛日
條一東・田吉
番〇三四一上電

眼科醫院
河原町今出川南側電停前
電話 33770
新藥・調剤・眼科用品
東山藥局
東野神社停留所前
電話 3119番

ツボスの君諸生學
ノハートケス
スピーサ生學
スピーサ朝早
スピーサ夜子人倫・金・月
階映
上町三丁目
電話 33770

モナルダの夜
石川啄木
黒い太陽
八日十
上町一丁目
電話 33770

若い者學科
十七日上映
交響樂
映 師藥町原河